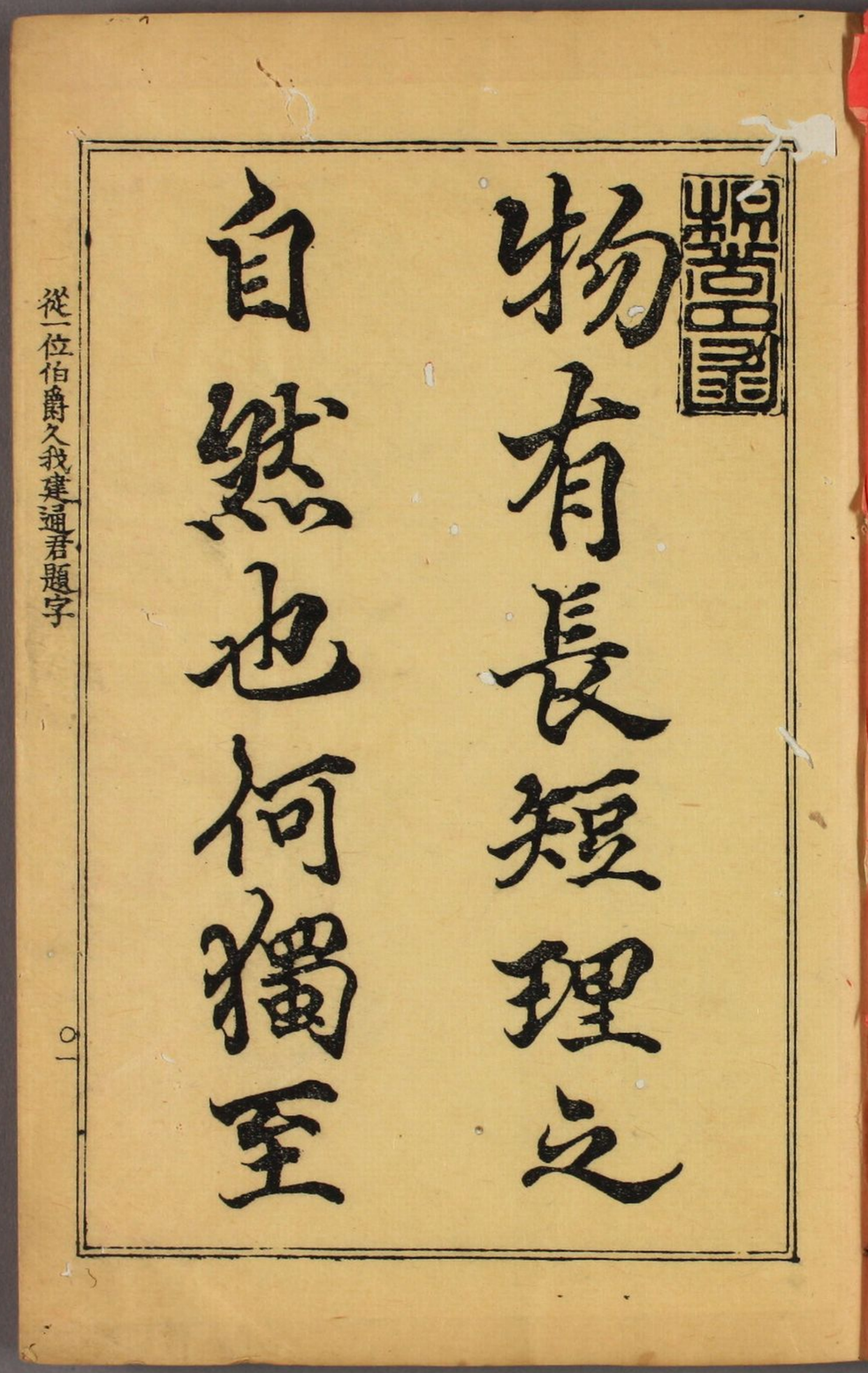
長歌改良論辨駁

全



海上胤平先生著

長歌改良論辨駁 全

明治廿二年五月

玄同舍出版

於歌而疑之

從一位久我建通書

方叱寡性

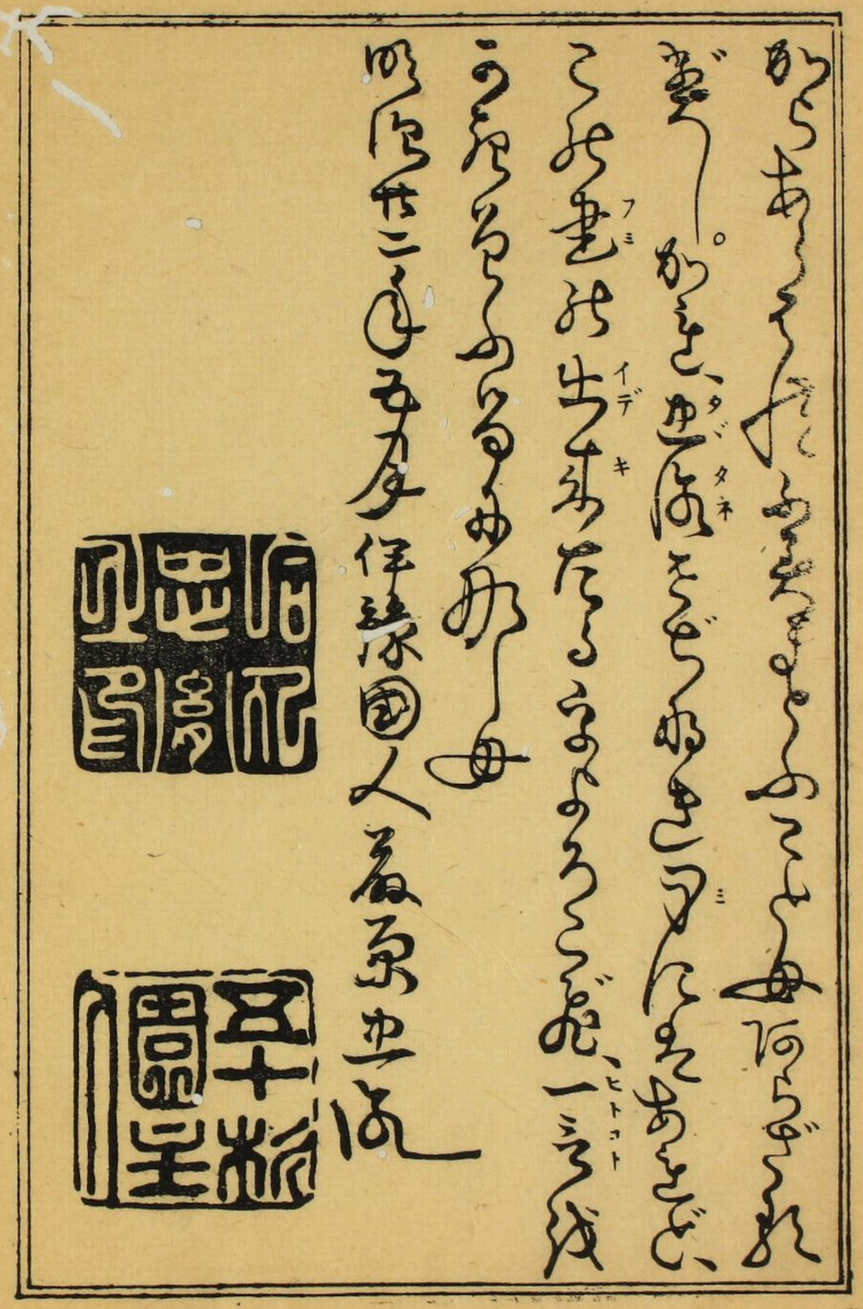
修之指導

正三位伯爵副島種臣君題字

小歌長新

定本

別信の作成



長歌改良論辨駁

海上胤平述

佐々木弘綱が書ける、長歌改良論を、一わたり見もてゆくに童の戯れ云へるがごとく、とりとめもなき事なりけり。かばかりの書に、言挙げせむい、拙劣き事なれど、道のためを思ひてのわざぞけたるば殊ゑ拙なき印なり

△長歌改良論曰、世ゑありとある有情非情の物、すべて聲あるもの也。されど氣に感じ、物に觸ざれば聲を發せず、たとへば、鳥獣聲あれども、季ゑ感ぜざれバなかず、草木音あ

れども、風ゝ觸ざれバ音をたてず、金石聲あれども、打たゝかざれバ音なし。絲竹聲あれども、彈人もなく、吹人もなければ、音なきが如し。そが中に、人は萬物の長にて、殊ゝ聲多き物なれど、默して心を鎭むる時ゝ聲出ず、されば共、人ゝ鳥獸抔よりは、物ゝ感ド安く、觸安けれバ、尤聲多き物也。其出る聲を言葉といふ。其言葉に、句と調といふ事あり。句とは聲をつらねて、ひとつの調となりたるをも、又調ゝてにをはのそはりて、三言四言五言六言七言などなりたるをもいふ。かく上古ゝ、句の文字數さまさまなりしかど、大方ゝ

五言と七言の句となれり。調とゝ、聲のとゝのふをいふ。是を漢語にてゝ、調子といへり。此調子あはぬ時ゝ、管絃ゝ勿論、人の調も更に感なく、意も通せぬ物なり。されバ、聲は調を第一とすべき也。其調は天地自然の物にして、更ゝ人作にあらず、ゝか定りたる物から、其人々の聲ゝよりて、みやびたるありさとびさるあり。美はしきあり。きゝにくきあり。又國々によりて、聲のゝらべかゝり、又世々ふるまゝゝらべのさま、うつりもてゆく物なり

〇今辨云。長歌改良論とあれば、規ゝ叶はざるを弘綱か改良

するとまや。然れば、上まで長々しく述られたるゐ、よしなきくたごとまて、文をなさゞるなり

△國々まて、横なまりかゐることとゐ、萬葉集の十四廿の卷などまて。いちじるく

○今辨云、國處かはれゐ、詞のなまることは、童も心得あるべし。さるを、萬葉集の十四廿の卷まて、著くなど、殊更に、茲まいへるば、如何なるゆゑぞや。たゞし、國かはり所ことなれゐ、强ひてみやびまて詠でこそ、東歌の如く、よこなまれる儘に、詠まてよしと云へるまや。然れゐ、弘綱は萬葉集を心得ぬなるべし。

東歌ゐ、見るものまして、習ふべきものまあらず。卑きも、尊きを學び、鄙人も、都人またちまさるやうま詠みてこそ、歌よみたるかひも有るべけれ。惡しきま習へと云ひては、改良の意まは叶ふへからず

△代々まを移りかはることは、記紀萬葉の頃の歌と、八代集の頃と、十三代集の頃との歌を、よみくらべ見ればおらるゝ也。かくおらべゐ樣々なる中まは、ことまはすぐれたるが句となれるを、つらねたるを。歌といへり

○今辨云、此くだりを見れば、調ゐさま〳〵に移りかはれど、

句のすぐれたるをつらねて歌と云へるよや。されバ、歌ハ詞正しく詠むべきよ、弘綱は、句の優劣をいかゞ心得られたるよか、ことしの春、みづからの歌ありとて、ほこりかよおこしたり。「たをやめの花と櫻を見いだしてやどらまほしきよし原のさと」かくても歌なりとや。古今集の序よ、大伴の黒ぬしハそのさまいやし。いはゝ薪おへる山人の、花のかげにやすめるかことし。云々「おもひ出てゝ、戀〳〵きときは、初鴈の、なきてわたると、人ハおらずや、」かゞみ山、いさ立ちよりて、見てゆかむ、とし〳〵ぬる身ハ、おいやおぬると、」かゝるたぐひをあげ

、貫之にいやしめられたり。此歌に弘綱が歌をくらべ見よかし。卑しきは暫くおきて、歌よハあるべからず。初句より二句の續き、たをやめの花と櫻をと云へり。こハ詞をなさず。たをやめは、女をさして云ふべき詞なり。花ハ草木の花をさして云ふべき詞なり。されバ。たをやめの花とハ云はれざりけり。かくてもすぐれたる句なりとや。花と櫻をとあるもいゝゞ、花と櫻となど有るべし。さて又、ことにすぐれたる云々とある。これより下文をあさず

△されバ、平語は、調のよしあしを撰ばねハ、人感動せざれ

ども、歌の句つゞきよく、調うるはしきゝ、人ゝいふも更に
て、目は見えぬ鬼神も、あもれとめで給ふ物なり。
○今辨云、こゝはてゝ、給ふ物かりとゝ、云ふべからず、目は見
えぬ鬼神も、哀れとめで給ふらむと云はされバ、とゝのもず
△さて、句ゝ上はいへるごとく、上代は長短あれども
○今辨云、あれとも、と云へる、此ゝてはをバ違へり、かく云ひ
ては下に應ずがたし
△大方ゝ、五言と七言となる物にて、古くは、先五言よりい
ひはゞめて、七言はつゞくが、定りなり

○今辨云、上は上代云々とありて、こゝはまた古くはと云へ
るゝ、いかにそや。五言より云ひはゞめて、七言はつゞく云々、
上には五言と七言となる物は云々、此くだり見よかし。ふ
つゝかならずや。
△さて、うたゝ短歌が始めはて、長歌ゝ後なり。そのはゞめ
ゝ、須佐之男命の神詠なり。「八雲たつ出雲八重垣つまごみ
は、やへがきつくる、その八重垣を」かく、五七五七七とつゞ
きて、一首となれり。つゞはあがうたのはゞめゝ八千矛の
かみなり。「八千矛の、神のみことゝ、やしま國、つまゝきかね

て、」かく、五七五七とつゞけもてゆきて、一首となるものなり。

○今辨云、短歌のかたにゝ、一首となれりとあり。長歌のかさまゝ、一首となるものなりとあり、かくてはとゝのゝず。一首となれりと、同じさまゝ云ふべし。さて、歌ゝ短歌が始めなりとゝ、歌道を辨へぬ人の云ふことなり。「八雲たつ云々、此歌を須佐之男命の御歌なりと、云へるは、誤まれるなり。こゝ、此神の御歌まゝあるべからず。いかゝとなれば、此神の御歌とて、外ゝ傳へたる御歌も見えざりき。且又、此一首ゝ引つゞきて、

三十一文字ゝ詠まれたる歌なゝ、これまでも、神の御歌にあらざる事ゝいちぢるし。然くて、句を重ね言葉あやなしたるさまは。短歌ゝして、則長歌の體なり、日本紀竟宴の歌のごゝく、此神を得て、後人の詠みたるを、神の御歌とせられたるなるべし。又、「八千矛の神のみことやしま國、つまゝきかねて云云と詠るも、此神の御歌にあらざることゝ、よく其意を考へて知るべし。仁德天皇の御歌なりとてつたへたる、「高き屋に、のぼりて見れば、云々、こゝ、藤原時平のうたなり。人丸のうたなりとてつたへたる、「ほのゝと、あかしの浦の、あさ霧ゝ云

々、おい、小野篁の歌なるべし。かやうなるあやまり多かれば、よく時代をおして、心得べきものぞかし。やまと歌のみあらず、からのうたもその始めに、古詩と云ふものにて、後に絶句と云ふものは、出來ようなり。また西洋のうたと云へども、文字の數さだまらぬなり。此ことわりに、いづれの國もかいるべからず。こが國神代のむかしに、歌のみならず、あまごともおほらかなれば、「八雲たつ云々」かゝる巧みなることは、詠み出づべからず。日本武尊の御歌よ、「にひばり、つくばを立ちて、いくよかねつる」、「をとめの、ここのべよ、我おきしつるぎの太

刀、その太刀いや、後にしても、かゝるさまになむある。「八雲たつ云々」と詠まれたるに、奈良の御代の歌なるべし。上代の歌に、文字の數も定まらざりしを、人丸赤人此大人等よいたりて、詞も調も正しく定まれるなり、千歳の後もこの二人のかみよたつべき人なし、貫之が古今集の序よも、歌の聖をたゝへ云いずや、されば神代のことに問いず。人丸赤人をもて中興の祖とおふぎ、此大人たちのあとをこそ學ぶへけれ、見よかゝ何々の歌并短歌と記るされたり、されば長歌をもて、始めと定むべきことならずや、ことわりも辨へなく、口よまか

せてひゝらくべからず

△かくて。奈良朝の頃までゝ。五七の句續なりしを。桓武天皇。都を平安城へ遷させ給ひし頃より。萬事往昔のさまゝ移りひ。花美ゝおりもてゆきて。

○今辨云記ゝ延曆十三年。相地於葛野郡宇太邑營宮城云々、宜改山背爲山城國士民謳歌稱曰平安宜從之云々、かくあれば都を平安城へ遷させ給ひしーとゝ云ふべからず、都を山背葛野ゝうつさせ給ひしとせねば、事がらたがへり、平安ゝ後ゝなれる名なり、そをおらざるにや。さて弘綱は花美と云

ふことを、いかが心得られたるゝか。桓武天皇ゝ、專政事ゝ御心を盡させ給ひて、いとものがたき天皇ゝ座しますことゝ記を見て知るべし、一つ二つを云はゞ、無益のものを廢て、有益のものを興し、擧ぐる處少なく廢つる處多し、庸主庸將ゝ花美奢りを好むべけれど、此大御代に花美なるおとのあるべきかは、そゝ何ゝよりて云ふことぞ、賴襄も此天皇を贊て、其精神氣力百倍前代主と日本政記に書かれたり。誤まるべからず

△歌の調も句もうつりて。五七の調忽七五の花やかなる

ならべとありて。

○今辨云、上のて文字、此くだりのて。文字重りて、聞きぐるし。七五の調云々、こゝ歌道も知らざる人の云ふことなり、貫之躬恒らが詠まれたる古今集の長歌を見よかし、初句いづれも五言の冠辭より發りて、七言は續き、五言七言七言此三句をもて結べり、なかれば七五の調とゝ云ふべからずこれを七五の調とゝ、初句七言は發りて、五言はつゞくを云ふなり、古今集の長歌ゝ、七五の調にあらず、五七の調を亂せる者なり、然れば調を重ぬとこそ云ふべけれ、句格も語格も對句も首尾

照應もなく、文字數多くならべたるまでは歌なりとゝ云ふべからず、弘綱がたくひゝ、是を七五の調と心得て、その誤まれるを知らぬなるべし

△萬葉集はてゝ、おかざりし鳥もきかぬ、咲ざりし花もさけれどゝいひしを、古今集はてゝ、長柄の橋のながらへて、難波の浦は立浪のとやうは、優美にかはりたり

○今辨云、貫之躬恒等が、五七のならべをみだせるも知らで、優美はかはりたりと思へるゝ、いかなるひが耳ぞ、長柄の橋のながらへて難波の浦に立浪のとある、此歌の姿を見よか

し、冠を沓(クツ)はき沓を冠に着さるが如し、これを優美と云へる弘綱い、歌道を知らざるなるべしもし七五の調を優美なりと、思ひたらむには、五七のしらべにい詠み出づべからず、古今集の序は、人丸赤人らを歌の聖とたゝへりそを思へば貫之を躬恒も此の大人等をおたひたることといいちおるし、されど跡追ひおきて、うしろかげだけを見ることや難かりけむ

△是自然の理にて、七五のしらべ、當時の調にあへる故なりけり

〇今辨云、七五の調、當時の調にあへる故なり云々七五の調當時の調にかなへるものならば、短歌も七五の調にこそ替るべけれ。然(シカ)るに短歌は。今も五七五七七、此五つの句をもて、一首の歌とせざるや、これも辨へずして、七五を今の調とは云ふべからず、五七の調は、古今動かすべからざる、正格なることを辨ふべし、此五つの句い、即長歌の五七五七とつらね、終りを五七七と結べる、正格を縮めて、短歌とはなせるものなり、かゞかりのことい、初學の人もおるべきに、弘綱いいかに心得けむ。もし七五の調をよしとせば、冠辞のすゑぞころ

も無かるべし、冠辞は無くてもよしと云へるまや、冠辞ある歌は、位ある人の冠着たるが如し、殊に優美まに聞ゆるものぞかし、七言ゝ沓の詞にて、上まゝ置くべからず、此正格をたまに亂してゝ、長歌改良とゝ云ふべからず

△かくてあまたの年經ましを、近く元文明和の頃、加茂眞淵翁古學を唱へて、長歌をも古體まに擬して作られしより、一犬吠れバ萬犬のたとへまにひとしく、其門人皆七五の調を、五七まに復してよみ出しより

○今辨云、眞淵翁をいかなる人と思へるか、翁ゝ歌道の衰へ

たるを深く憂ひ、專萬葉集まに心をとめ、人丸赤人此大人たちの遺業を繼ぎ、道のおくかをきはめ、古への跡まどふことなからしめたる、其功績云ふもさらなり、言靈の幸ふ、吾國の幸ならずや、實まに千歲中の一人にて、人丸大人赤人大人まに次ぐべきゝ、此翁まになむ有りける、誰かたふとバざらむ、弘綱は何ものなりや、一犬吠れバなど云へる、こは汝のごときものに引くべき譬へあり、眞淵翁は虛言を云ひて、人をまどはせし翁まにあらず、文中まにおのれもとより文を好むと云はずや、其文かくことは、誰もり誰まにつたへたるを、誰まにあらひて云ふこ

とぞ、縣居大人の神靈、天うけり見そなはすらむ、此神の教を
こゝいろにつかひて、痴人をまどはし宗匠がほにるにはあ
らずや、然るに其恩賴も思はす、おほけなくも此神を、虚ゝ吠
ゆる犬に譬へ然のみならず其をしへ子等をも皆犬ゝ譬へ
たるゝ身の程も知らざる云ひざまならずや、且又此神、日を
つみ月を累ね、いたづき給ひて、古への跡定められたる、其長
歌をさへ、そしりのゝしる、こゝ何の心ぞや。卷中長歌改良論ゝ筆の花第九集
ゝ出ゴの人々ゝいかに思へるゝ、弘綱は恩賴をかふむりて禮
なしと云ふべし、といふべし禮なきゝ鳥獸ゝして人ゝあら

ず

△古學からはぬ人々も

〇今辨云、歌ゝしも神代より傳ゝれるものなり。此の道を學
ふも則。古學なるをや。宇義も知らざる。文盲とこそいふべけ
れ、學と云ふ文字ゝならふとも。おぼゆるとも。さとるとも訓
めり、總べて古きを學ぶを古學と云ふべし、

△短歌ゝ近體ゝて、長歌ゝ五七あり。

〇今辨云、こゝいかなることを云へるゝか、こと葉ふにくか
ゝて解がさし、たゞし、長歌は五七なりとあるは、古への長歌

い五七の調、近體の長歌は七五の調と云ふこゝろに至かく云へるまや、おかれバその七五の調なる長歌と云ふものゝ、何をさして云ふことぞ前まこと擧げせし、貫之躬恒等が歌を七五のおらべと思へるあやまりより、かゝるひが〳〵しきことをも云ひ出でたるものと見えたり、笑ふべきことなふずや、歌いたゞ古へまならひて、句格語格を誤らず、趣意のめづらしきをとり、高調優美まに詠むべき外なし、こゝに心をとめずして、近體古體など、わけ隔てするゝ。歌道を知らざる人の云ふことあり。萬葉集を學びて、萬葉集のおとく詠めるゝ、みその味噌くさしと云へるに似たり、近調と唱へ、歌よむ人は弘綱のおとく、たをやめの花などよみて、おたりかはなるそゝ道を知らぬと云ふべし

△おかいふ弘綱も、五七まのみよみ來つる。に。つら〳〵思ふに。七五の調則今の調なるを

○今辨云、來つるまとあるゝ來つれとゝいふべきをやさて七五の調を、今の調なりとは云ふべからず、そゝよしと思へる、弘綱が調なりとも云はむう、人まの尊きあり、卑しきあり、歌またふときあり、いやしきあり、心尊き人ゝ、たふとき歌を好

み、心卑しき人ゝ、いやしき歌を好むものなり、尊きゝ長歌短歌、卑しきゝ今樣よしこのゝたぐひなり、されバおの〳〵好むところよりて、人がらも知らるゝものぞかし、漢の詩も學べバ作り、洋語もならへバ云ふなり、此ことわりも悟らで、七五は今の調なりとゝ、おのれの卑しきを、知らぬと云ふべし

△短歌ゝ近風よりて、長歌のみ復古して、ふひて古風よりむべきいはれ更。なし

○今辨云、更よりと云ふ詞は斯在るところより云ふべからず例を見て知るべし、古調近風のことゝ、既に盡せり、されバ今更

こゝに云はざるなり。詠むともよまぬとも、おのが心にまかすべし

△總て復古に、よき事多けれども、調のみゝ、自然より代々移り來ぬる物よりて、七五の調を、今更五七より、復古せさすべきやうゝ、なきものなり、

○今辨云、前より云へるが如く、歌より七五の調なし、五七の調を誤まれるなり、誤まりを改むるに、何かすべなきやうの無かるべき、宗匠がはする人々、初學の人々に示さむよりゝ、忽悟り得べからむ、教へずして、すべきやうなしとゝ、云ふべからず

△おかるゝ、長歌を得よまぬ歌よみは、歌よみにあらず、貫之躬恒もかた羽者ゝて、短歌はよめども、長歌ゝ得よまず

と、おほけなくも、口を極めて、人毎ゝいへる先生あり

○今辨云、此先生ゝ、いかなる先生ゝか有りけむ、其いふことを聞きては道おらぬ人は、にくげにも思へるかめれど、此先生の論、實ゝことゞりゝなむ、大聲不入里耳とかや、弘綱おろそかゝしてさとりえぬものと見えたり、心ゝ落ちざらむゝは、よくきゝたゞし、是非を定むべきものかるに、さゝなくしてその名をさへかくせるは、弘綱が常ゝおそれねたましく

思へる、大先生と知られたり、かゝる先生ゝ、いづれの人か、胤平類ゝおたゝしく思ゝるゝなり、其名を示したまへ

△あゝいかおる非が心ぞ

○今辨云、ひが心ゝあらず、此先生の云へること然り、いかゝとなれば、片羽と云へるゝ、鳥の片羽なき意なるべし。かた羽ゝてゝ、其身保ちがたし、さて歌ゝ長歌あり、短歌あり、情の少なきをのべむゝゝ、短歌ゝても云ひ盡すべけれど、情の多きをのべむゝゝ、長歌にあらされバ、云ひ盡しかたし、そゝ人々常にやりとりする文ゝ、長き短きあるが如し、短き文は書き

ても、長き文を書き得ねば、ことかぐべし、絶句ゝ作れど、古詩を作り得ねゝ、詩人にあらず、草書ゝ書きても、楷書の書けぬゝ書かきまあらず、草畫ゝ書きても、眞畫の書けぬは、畫かきまあらず、是皆歌に長き短きあるがことし、二つの者一つかげたるを、片羽と云ふなり、貫之躬恒ら短歌ゝ詠みても長歌ゝ詠みえず則片羽者と云べし、この責めを遁れたりしゝ、けふまでの僥倖とや云ふべからむ、後世おそるべしとは、此事ぞかし、貫之躬恒らなかりし後は、この言擧ありつるも又歡はしき事ならずや、歌道すゝみたりとこそ云ふべけれ、此先

生の高論ゝ、はこるまあらず、たたくしまあらず、實まありかたきことなりけり、弘綱ゝ是をおらずや、愚と云ふべし

△抑吾國上古文字なくして、人々口々まを言傳へ來まけれ。ば、文字渡りて。後も猶同ドさままて。たま〳〵文かく人も漢文のみ成しかゝ。短歌まて。思ふ事言盡し難き時ゝ長歌をよみつるまは、中古かな文字出來まーより、其便利よくなり。て。短歌にて、言盡し難き時は、かな文まを書取事と成。て。長歌は自然ますたり、慰もの、やうまなり。て。

〇今辨云、此くだり文をなさず、拙きことといふもさらなり、

いかなることを云へるゝか、獷の尾ゝ飴をつけたらむこゝちして、解がたし、てにをハさへ違ひて、意も貫かず、ふつゝかなる廉々擧ぐるゝいとまなし、さて慰もの云々これがためゝ云はむ、慰みものゝもせよ、長歌の道知りたらむゝは、感もすべなれど、此時代の人々、長歌ハ一首も詠み得ぬなり、然れども勤めすして、道を失へるものゝぞ有りける、仁明の帝御よはひ、四十ゝみたせ給へりし時、興福寺大法師が、長歌をよみて、ほぎ奉りし、其長歌ハ調ひたりとにハあらねど、貫之恒躬らの及ぶべきゝあらず、そハ時ゝとりて、いそしみたりと云

ふべし、季世陵遲斯道已墜今至僧中頗存古語可謂禮失則求之於野、故採而載之云々、こは續日本後紀ゝ載せられたり、此事も知らずや

△短歌ゝ巧なる人も、長歌ハ生涯六七首の外ハ、よまぬやうゝ成たり、そは家々の集ゝていちぢるし

〇今辨云、短歌ゝ巧なる人も云々、かく云ひてハ、短歌ゝ巧なる人ハ、長歌ハさやすく讀得べきものゝやうゝきこえ、詞ふつゝかゝて、文をなさず、長歌と短歌と、いづれかやすき、いづれか難き、短歌をよみても、長歌をよみ得る人ハ、千人ゝ一人

も有るべからず、長歌をよみて、短歌をよみ得ぬ人ハ、千人ヨ一人もあるべからず、ものゝけぢめもなく、あやしき事を云へるものかな、生涯ヨ六七首ばかり、よみたらむとて、長歌の長歌たることは、知るべからず。そを歌なりと思へるは。歌の歌たるを知らぬなるべし、僅三十一文字だにも、生涯六七首ばかり、よみたらむとて、語格も辨ふべからず、たゞ指をかゞめ、文字數をならぶるまでのことなるべし、まして。長歌ヨいたりていハ、たやすく詠み得べきものならず、其六七首ハ何人の家の集ヨか有りけむ、おぼつかなし

△ざれバ貫之躬恒ら、片羽者ヨハ決。てなし、殊ヨ紀朝臣ハ、歌ハいふべくもあらず

〇今辨、云。貫之が歌集を見たりや、よく心をとめて、知るべし、歌道を知らざる人ハ、たゞ名ヨおぢて、よしとのみ思へるなり、弘綱が心ヨは、さもあるべからむ

△文かく事ヨ、秀られたる事ハ、古今集序、大井川行幸序、土佐日記などにてゐるけ。れ。バ

〇今辨、云、貫之文かく事ヨ秀られたる云々、日記などにてゐるけ。れ。バ、此けれバと云ふこと、下ヨ應せずして。意味解がた

し、弘綱文かくすべもならで、貫之が文の、よしあしをいかでか辨ふべき、貫之よし文いたくみまもせよ、長歌改良まゝ益なき人あらずや、人丸赤人此大人たちをこそたゝへ云ふべけれ。人たがへしたりや

△長歌ゝよまでも、ことかゞねゝ、心とせられざりしや

○今辨云、弘綱おのが意を、貫之まうつして云へるまや、所謂虎の威をかる狐まに似さりか、るまひでとも、て、人をまどゝすべからず、貫之が心まゝ、思ひもよらざることなるべし、弘綱ゝ貫之を賞づるまに似て、なか〳〵に貫之が徳を失へるが

如し、貫之今の世まありとも、長歌改良のことまゝ、一言半句も出づべからず、長歌改良とあらば、先人丸赤人二人の大人、其次まゝ、奈良の御代より千歳を経て、此間長歌よみえた賀茂眞淵翁をはじめ、歌道まに秀たる人々をあげ、然してその事をなすべきを、こゝまも心つかぬゝ。本をたゞさで末を論ふものと云ふべし、然るまに、詠むすべも知らざる、貫之など引出だせる、こゝ笑ふべきことならずや、且また情の深きゝ、かな文まて書けば、長歌ゝ詠までもことかゞぬなりとや、かゝる戯言は、三尺の童子も云ふべからず、歌ゝ歌なり、文ゝ文なり、歌は

うたにて、めでたきものあり、文ゝふみまて。おもしろきものなり、をからずや、歌ゝよまでもよし、文まかけばことかゞぬなど思へる弘綱もまた、かの先生の云はれたるが如く、片羽者と云ふべし

△そゝ朝臣のみならず、紫式部の才まても、長歌ゝ不用の物と思ゝれしまか、源氏五十四帖まに一首も見えず

○今辨云、此紫式部をこゝまに引出でたるゝ、何のゆゑぞや、文を作り歌もよみ得る人あり、文ゝ作れと、歌ゝよみ得ぬ人あり、歌ゝよめども、文ゝ作りえぬ人あり、これをからずや、紫式

部も、文を巧まかきたれはとて、歌もたくみまに詠めるものと思へるは、淺らかなる考へとや云はむ、源氏五十四帖まに、長歌のなきを見ても、よみ得ぬことゝいちをるし、おのれ長歌よみ得ぬとて、いとも尊き長歌を、不用の物などいかでか思ふべき、さゞかりおろかなる、式部まゝあるべからず、かゝるをひ言は云ゝざるものぞ、心ある人まに笑はるべし、紫式部ゝ、文ゝ巧なれども、歌はつたなしと云ゝむまゝ、論ふゝしも無かりしを、人の思はざらむことまでも。思へる弘綱ゝ。狐よりも疑ひの深くや有りけむ、かばかりひがみたる男に。贔負せら

るとも、紫式部い。道しれる女なれば、嬉しとい思いざるらむ、長歌改良の事よい。用あき女ならずや、女に似たらむ。男ども打よりて、かな文改良の。をりも有りたらむにい、紫式部の亡(ナキ)霊(タマ)を招きむかへて、上座に居べし

△さて短歌のめでたくすぐれたる、又文章のめでさき祝詞宣命物語冊子などよい、神も人も感ドてさま〳〵の感應有し事ゐまた見えたれど、長歌を神も人も感ぜし事上古は知らず中古より更に。例なし

○今辨云、例の更にまた出たり、をさなき事を云へる老人かな、短歌のめでさく云々とあれば、弘綱も其めでたきを好めるよ、さていい口と心と。合はぬ人とや云ふべからむ、弘綱い歌道を誰にならへるぞ、井上文雄の弟子ならずや、(伊勢家裏跋文よ知られ)たり文雄の歌集を見るよ、句調卑しくて、歌のやうよい思いれず、かれよならへる弘綱なれば、句調のいやしきも、また宜(ツベ)なりけり、何事も師い撰ぶべきものぞかし、祝詞宣命物語冊子などよ神も人も感じ。さま〳〵感應ありしとや、かやうなる事は、女わらべのもてあそべる。冊子よもあることなめれど、八束髭生ひたらな大丈夫は、耳よもとむべからず、もし弘綱

が神あらむには、人丸大人の歌を鼻のさきまさ〳〵出しても、赤人大人の歌を耳近くうたひあげても、よゑこのど〳〵いつはどまも思はざるべし、されば神の感應は、あてませざらむぞよかりなむ

△されバ長歌ハ、只古學者のなぐさみ物まて、古人の口眞似なり

○今辨云、おぐさみまするも、口眞似するも、其人によるべし、かいなでまは云ふべからず、そも〳〵歌と云ふものハ、人の心の花なり、よく詠みたらむまは、人々めでよろこぶべし、惡

しく詠みたらむまは、人々そゑりあざけるべし、なぐさみまは詠めバ、慰みものなり、教へまは詠めバ、をしへまなるべきものぞかし、歌學する人、こゝまは心とめざれば、弘綱のごとく生涯あやまるべし、さて又長歌は、古人の口眞似と云ハゞ、短歌も文も又口眞似とやいはむ、よし口眞似なりと云はゞ、ゑびらく口眞似ませむ、その口眞似だにも、弘綱が口にてハ、なー得べからず、口眞似にても詠み得るぞ、詠み得ぬまハまさりて有るらむ、おぐさみまてゑろし、口眞似まてあしかりとならバ、歌も詠まず、文も作らぬぞ、よかるべき、例のことかゞぬ

とか、不用とか云ふまとゞまれり、然らば歌も詠まぬがよし、文も作らぬがよしと、こそ云ふべけれ、かくまでおしつめて。云ゝざらむまゝ、ことわりたちがたし、弘綱ゝよゝの花を見たりや、見ざらむまゝ。さとりがたかれど、試みまゝ云はむ、まづ短歌ゝ、庭の面に咲出でさる、一本二本の花の如し、長歌ゝ吉野山の五百本千本の花の如し、かく示しても見たりしことのなからむまゝ、胤平何をか云へると猶あやゝみて、心の雲やたちさとぐらむ、若も見たりとならば、いづれかおとれる、いづれかまされる、考へ見よかし、庭の花をほめ、吉野の花

をそしりたるゝ、はづかしきことならずや、ものゝ辨へもなく、みだりまひゝらゞべからず、ばせをも「口あけばはらわた見ゆるあけびかな」と云へり。さづか十文字あまりの短き詞まても、教へまゝ詠めを、かくぞ有りける、これをもて、長歌のたふときことを知るべし

△さるを。かの先生は

〇今辨云、弘綱は其人の名もさゝで、頻まかの先生おゞ、ねたましげに云へり、心のうち女に似て、男らしくもなき男あらずや、然るまゝ其先生ゝ、いなともうとも、云はざりけり、そゝ痩

羊が、虎の髭をもむが如くまなむ、さばかり思ふまも、ます〳〵ふたいゝふき先生まぞ有りける、されど又胤平おもへらく、其先生の如く、ゆるやかにすぎたるも、始めありて終りのなきまに似たり、道のため云ふべきことゝ、云ひたるぞよかりなむ

△七五の調の長歌ゝ、よしこのどゝいつまは同ドと、あバきいへれど、よしこのどゝいつは、人のうさを晴し、心を慰むる徳あれど、長歌に其徳ふきをいかませむ

○今辨云、七五の調の長歌とは、貫之躬恒らが歌のたぐひを

云へるまや、されバ。七五の調にゝあらざりけり。そのこと擧げゝ、前まに云へれバ。こゝまに云ゝざるなり、よしこのどゝいつゝ、長歌をひとつに云ふべきものまあらず、長歌まに徳あしとや、弘綱は徳と云ふことだにも。辨へぬなるべし、長歌の徳こゝに云ゝゞ長し、そゝ馬の耳まに念佛、云ひて詮なし、もしきかまほしくバ、我門まに來たれかし

△されバ今よりは、長歌のかはりに、今様をよまむとす

○今辨云、今様をよむともよまぬとも、そゝ、弘綱が心まにまかすべし、長歌改良まゝ、よしあき云ひぐさならずや

△今様ゝ七五の調にては、第一の雅調感深きものゝよて。

○今辨云、七五の調を第一の雅調と思へるゝ、弘綱のひが耳なり、人はさゝ思はざらむ、こは鷺を烏と云ふゝ似たり、弘綱は雅調と云へることゝも知らぬなるべし、されゞ其あらましを云ゝむ、五七の調は陽の調なり、七五の調は、陰の調なり、五七の調ゝ、強の調なり、七五の調ゝ、弱の調なり、五七の調ゝ、始めほそかれど、終りふとき、が如し、七五の調ゝ、始めふとかれど、終りほそき、が如し、臍下に氣を張りうたひあげて、聲の殘るが如きなるを、優美とも雅調とも云へり、始めをほそくう

たへゝ、終りて其聲殘れり、始めをふとくうたへば、終りて其聲殘らず、是自然のことわりゝなむ、或人七五の調を、幽靈調と云へり、そゝ上ふとく下ほそし、かゝる故ゝか有りけむ、此幽靈調を好みて、弘綱かよめる歌ゝ、目的とする、神の感應は覺束(オボツカ)なし

△かの慈鎭僧正、四季の今様は、今ゝ人々もうたひ、おほやけの唱歌の中ゝも入て、童子にうさゝせ給。ふ、感深きを知るべし

○今辨云、慈鎭僧正は、法師なれゞ、幽靈調を好みたりし、故

あることゝか有りけむ。此調は、佛の感應ある調なるべし、こ
れを童にうたいする、おほやけの唱歌ゝいれたりとて、感深
しとい云ふべからず、只時の流行と見て有りなむ、貫之躬恒
らは古今集の撰者なれ共、惡しきいあしきなり、誤りいあや
まりなり、惡しきをよゝと云ひ、誤りをあやまりなりと云い
さるい、世ゝ媚び、人に諂らふとや云ふべからむ、今樣をおほ
やけの唱歌ゝいれたりとて。あながちゝよしとのみ思ふべ
からず、土佐の國の飛鳥井雅澄と云へる人い、道のために心
をこらし、萬葉集古義百卷を編り、こいいそしき人ゝそ有りけ

る、此書をこの頃宮內省ゝて、櫻木に載せられたりとかや、萬
金を費して、益なきものをかくものすべきかは、そい云ふも
更なり、さて慈鎭僧正が作りし、七五の調を。おほやけの唱歌
ゝいれたりとて。よしと思いゝ、五七の調なる。萬葉集古義も
おほやけゝて、櫻木ゝ載せられたるものなり、かれとこれと
を思ひあいせて、ことわりを知るべし、萬葉を知らざれバ、長
歌いよみ得べからず、萬葉も知らで、五七（七五）の調を第一の雅調
と思へる、弘綱あやまれるかな

△さて今樣い、常ゝ七五四句のを作り、事とある時い、八句

十二句十六句など、長く作りて、長歌よかへむと思ふい、よしやいなしや

○今辨云、今様い常よ七五四句のを云々、のをと云ふこと、語をなさず、さて又事とある時は云々、こゝに云ふべき詞ならず、此詞の意い萬葉集よ「吾大王、ものなおもひそ、ことしあらば、火よも水よも、これなけなくよ、」これにて知るべし、七五四句を作り、或い八句十二句云々とは、など云はざるや、さて今様を長歌よかへむよ、迷ふべくもあらぬを、ちしやあーやと心さだめかねたりや、そい心まかせよひねり出づべし感げ

る人のありやおしやいはかりがたし

△おのれもとより、かな文と今様を好みて、あまた書もし、作りもしつれど

○今辨云、弘綱文を好みて、あまた作りしおど、ほこりかに云へれど、此論文を見るよ、首尾照應もなくて、文かく法よ叶はず、かくても文ありとや、此くだりよもかな文と今様を好みて云々とあり、こいかな文と今様とを好みてと云ふべきをやて、百首にいみたず

△長歌い、人のこへばすべなくて作りたるが、七八十首よ

○今辨云。長歌ハ家々の歌集ヨ、生涯六七首のほかハ詠まぬ云々と云へる、その舌の根も乾かぬほどに、おのれの長歌、七八十首ヨて、百首ヨもみたず云々と書かれたり、これを見てハ笑ふ人多かるべし、中ヨは驚く人も有るべけれど、道のため一言をもて、驚く人々のまどひを解かむ、弘綱去年の冬ばかり、胤平ヨ云へらく、長歌ハ詠み得ず、漸十首ばかりを作れり、暇あらむをりに、添削を乞ハむとて、みづから持來れり、これを見るヨ、一首もとゝの ひたるハなかりけり、宗匠がほして、かばかりのことだヨも、なし得ぬハいかヨぞと、心のうち

ヨ思ハれて、たゞ捨おきたるを、四たび五たび催促されて、今年の春弘綱の使館忠資にかへしやりぬ、かく云へば、胤平また何をか云へると、疑ふ人も有るべゝれば、そのおるしとなるべきこと擧げせむ、貫之躬恒らを神のごとく思へる弘綱なれば、詠むすべも知らざる、此二人よりも、つたなきことい云ふも更あり、さて又文中ヨ、人のこへばすべかくて、作りたるが、七八十首と書かれたり、かばかりの精神より、詠み出でたるものなれば、弘綱が文句の如く、すないち慰みものにて、とゝのふべきいハれあし、これにて大をそどりのをそなる

ことを知るべし、僅三十一文字の歌だにも、一首をつらね一日を經てこれを直し、二日を經てこれを改め、三日を經てこれを見れば、その拙きを知るあり、人は知らず。我いかくぞ有りける、いいめや、長歌にいたりては、たやすきものにあらず、貫之躬恒らと云へども、詠み得ぬをもて知るべきなり。「好」そのゝ上手なりけれ」と、古人も云へり、長歌嫌ひなる弘綱なれば、下手なるもまた、ことわりぞかし

△こゝ我のみならず、平田篤胤翁、鬼島廣蔭主も、長歌ゝ益なき物と思はれしと見えて

○今辨云、弘綱か心とは、さも思ふべけれど。篤胤翁ゝ。さばかりは、心狹き人とゝあるべからず、知らずや、皇國の學びを引起さむ事を旨とせられて、弘綱が前に云へる、吾國上古文字なくして云々、此文字をだにさがし出ぬ、さバかりに志厚き人にぞ有りける、これとても、神代より傳はれる、長歌を益なしと、ものゝ考へもなく、戯言いふべき人ならぬを知るべし、古學の爲に。江戸を追拂ゝれたる大丈夫にて、世に媚び人に諂らひ、伊勢海老の如く弱腰かゞめ、學者の眞似する學者にあらず、まことの學者なり長歌を益なきものと、思ゝれしと

見えたるなど、篤胤の名をかりて、おのが意を述べたるゝ、前よも云へるが如く、虎の威をかる狐とや云ゝむ、篤胤が歌集を見よかし、長歌數首出だせり、もし益なしと思ひたらむにゝ、詠むべきいゝれなし、篤胤が歌集も知らずして、みだりがはしきこと云ふべからず、此人よしや、益なしと云ひさりとも、ことわりならぬゝ、ことわりならぬなり。そを辨へぬは、いかなる痴心ぞも。さて眞淵翁ゝ、專言葉の道よ心盡されたる人なり、篤胤翁ゝ專神典よ心盡されたる人なり、おの〳〵あすところゝ別なり、そゝ身ひとつにして、かれもこれをかし得

がたきを知り、かた〳〵に心寄せられ、其道々をふみ廣めたるよそ有りける、かゝる人をこそ、道を思ふ人とゝ云ふべけれ、今の世の人は、かれもこれも知れるがほ〳〵て、皆知らざるなめり、いゝゆる猿藝益をなさぬと云ふべし、人丸赤人此大人等ゝ、學者の聞えなけれど、歌の聖とたゝへられたり、篤胤は神典よくはしげれど歌ゝ拙かし、この篤胤を長歌改良のことよ引出でたるよは、本居宣長翁のことをも、少しゝ云ひてよかりなむ、足らはぬこゝちせらる、弘綱ゝ伊勢人なるよ。宣長を知らずや、たゞし宣長ゝ長歌もよく詠みて、眞淵翁の

跡をつぎたる人なれば、心に叶いぬものと見えたり、鬼島廣蔭をこゝに引出でたる、これも又、人違へしたりや動もすれば。ゐひ言を云ひならべて。痴人をまどいする弘綱は、いよいよ狐に似たりとこそ云ふべけれ

△歌集文集にあれども、長歌集は見えず、猶もれたる事い、今様考にいふべし

○今辨云、篤胤が長歌集のなかりしい、長歌集とて別にあらはすべき、歌の數無かりしゆゑなり、廣蔭か長歌集のなかりしい、詠み得ぬゆゑなり言幸舎歌集あり篤胤と廣蔭との長歌集見え

されはとて、殊更にこゝに擧げたるい、いぶかしとも、いぶかしと云ふべし。こは心くるへる人の云ふことに似たり、宗匠がほする人々は、長歌集はゐばらくおきて、短歌のみならず、長歌も詠まゝほしきものとこそ云ふべ々れ、この心得あからむには、人の歌添削など、はばかるべきものぞかし、されば おのれをゐれる人とも、道を思ふ人とも云ふべきなり、歌道も知らずして、長歌改良とい何の心ぞや、世にもはぢずをこがましと云ふべし、長歌いよまでもことかゞぬ、長歌い益なし。長歌は徳なし、長歌い不用のものなど、さま〳〵に、云ひの

ゝしるのみまて、長歌改良のことゝ、いづれまに擧げたるまか、文中に一言も見えず、かくても長歌改良論なりとや、おゝ長歌改良論まあらず、長歌廢絶論なり、改良の字義も知らざる文盲ならずや、文箱をかざり學者の眞似をし表題のみ知りさるまてゝ、やくたつべからず、譬へ千卷の書を見さりとて其意を知らざれば、何の益かあらむ、我國神代より傳ゝりし歌道を妨ぐる汝は禍者なり、胤平が直き言葉に從ひて心の改良せよ

明治廿一年十月三十一日

正誤

一頁五行 拙劣き事ハをとなげもなきさま〇ためを思ひてのさかぞハ ためまに筆をそむるになむの衍〇四頁八行 詠まてハ詠みて〇十三頁五行 聖をハ聖との誤〇十六頁六行 これをの三字ゝ衍〇十六頁九行 調を重ぬハ調を成さぬの誤〇十八頁八行 當時のまハ當時の調にの誤脫〇二十二頁九行 といふべしの五字ゝ衍〇三十頁二行 楷ハ階の誤〇四十四頁四行 かたかれどハかたかめれどの誤脫〇四十七頁三行 長歌をハ長歌と〇五十二頁七行 五七ハ七五の誤

東色爾は却て誤なり　故に来らば

一番地 野
番地 平
番地 舍

丶しるのみまて、長歌改良のことゝ、いづれまゝ擧げたるまか、文中に一言も見えず、かくても長歌改良論なりとや、まゝ長歌改良論まあらず、長歌廢絶論なり、改良の字義も知らざる文盲ならずや、文箱をかざり學者の眞似をし、表題のみ知りさるまてゝ、やくたつべからず、譬へ千卷の書を見さりとて其意を知らざれば、何の益かあらむ、我國神代より傳ゝりし歌道を妨ぐる汝は禍者なり、胤平が直き言葉に從ひて心の改良せよ

明治廿一年十月三十一日

明治廿二年五月七日印刷
仝　年五月十日出版

定價金貳拾錢

發行兼印刷者　東京神田區今川小路二丁目十五番地　高市菅野

著作者　東京神田區錦町三丁目五番地　海上胤平

發行所　東京神田區佐柄木二十一番地　玄同舍